

今を生きる子どもたち

貧困と格差の拡大のなかで

II

①

子ども6人に1人が「貧困」。子どもの貧困対策法の成立から3年、子ども食堂や無料塾など食事や学習の支援活動が各地ですすめられています。学校や家庭に居場所を見いだすことが困難な子どもたち。地域社会とつながりが切れてしまいがちな子どもたちに、どのように手をさしのげるのか。「子ども支援」の現場を訪ねました。(荻野悦子)

さまざまな事情を抱えた子どもたちを支援する「一般社団法人てのひら」。静岡県内5カ所で、学習支援・生活支援を続けています。月に1回、子ども食堂も開いています。

総勢20人の食卓

駿河区の生活支援の居場所では、登録している6人の子もたちが週1回、送迎の車でやってきます。夕食をばさんで午後6時から

8時半まで、スタッフや学生ボランティアたちと思い思いに過ごします。総勢20人あまりで囲む食卓にぎやかなこと。あっという間に時間が過ぎていきます。

勉強道具をもってきてボランティアと一緒に勉強する子もいますが、カードゲームやボードゲームなど、「てのひら」に用意された遊び道具で遊ぶことがほとんどです。「てのひら」副

居心地のいい場所



ボランティアの学生と遊ぶ子ども

代表の杉村佳代子さんはいます。「生きる力がついてくれば、必要ときに勉強はできる。『てのひら』は生きる力をはぐくむ場です」

「ここは居心地がいいから」というのは原野明幸くん(18)「仮名」。中学2年の終わりがころから4年間、「てのひら」に通いました。父子家庭で男ばかりの兄弟3人と祖母の5人家族。弟と父親との折り合い

境界ない「支援」
自分に支援が必要だと思

が悪く、弟の生活が荒れてスクールソーシャルワーカーが弟の相談に乗っていたのが「てのひら」とつながったきっかけでした。両親が離婚したのが5年生のころ。母親が大好きだった明幸くんはわんわん泣いたといいます。「そのうち、いない生活になれたけど」

「『てのひら』は、支援する側とされる側の境界がない」と明幸くん。目標や夢をもたなかった明幸くん

「『てのひら』は、支援する側とされる側の境界がない」と明幸くん。目標や夢をもたなかった明幸くん

支援のネットワークづくり



杉村佳代子副代表の話
登録している子どもの多くがひとり親家庭で育ち、経済的な困難を抱えていたり、虐待を受けた経験があったりします。支援を必要とする子どもに支援が届くよう、市のスクールソーシャルワーカーや生活保護のケースワーカーなどと連絡をとりあいながら、子ども支援のためのネットワーク作りをすすめてきました。学校や児童相談所などの公的機関が介入することが難しいケースもあります。一つひとつのケースに対応しながら、関係者が当事者の思いを共有し、連携して支援できるシステムが構築されていけばと思います。

「たまたま、何かきっかけで自分には母親がいなくて、落しこぼすのを思い出すと、落ち込んでしまいます。『てのひら』で年下の子どもたちと一緒にしゃべったり、騒ぎすぎてスタッフに怒られたり。そうして、ときをやり過ごすことができた。この春、福祉系の大学に進学しました。学生ボランティアの一人、仲程慧真(えま)さん(19)は、「自分と違う考え方に触れ合うことができ。自分にとっても居心地のいい居場所」といいま

(つづく)
(5回連載の予定です)